住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒　604－8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町１０
代表取締役社長　　川下　晃正
ＴＥＬ　（０７５）２１１－７２７７
ＦＡＸ　（０７５）２１１－７２７０
http://www.kyoto-archi.co.jp/

第 26 回合宿研究会 in 愛知

日時：2022 年 1 月 8 日（土）13 時～16 時

テーマ：

アフターコロナを見据えた福祉政策の課題と展望
――運動論の視点から――（仮）

参加費：2,000 円

開催方式：ZOOM（主会場は愛知）

2022 年 8 月の第 27 回社会福祉研究交流集会 in 愛知の開催に向けて、愛知をメイン会場に合宿研究会を開催します。詳細・参加申込みは総合社会福祉研究所ホームページをごらんください。

総合社会福祉研究所　TEL06-6779-4894　FAX06-6779-4895
ホームページ：http://www.sosyaken.jp/　　E-mail：mail@sosyaken.jp

くらし応援！ 第3回食料支援in高槻

９月20日、大阪府高槻市内にある大冠（おおかんむり）保育園を会場に、フードバンクプロジェクト高槻が主催する第3回食料支援がおこなわれた。高齢者夫婦や子ども連れの家族など約100人が訪れ、総数50人近い実行委員・ボランティアと交流しながら、食料・お菓子・日用品などを袋いっぱいに詰めていた。

第１回は、４月に高槻市内の大学近くの教会を借りておこない、20人を超える学生が訪れた。第２回は、６月に府営住宅や団地が立ちならぶ地域でおこない、はじまる前から長蛇の行列ができて1時間足らずでほとんどの品物がなくなった。今回からLINEやSNSでも情報を発信し、それを見て遠方から足を運んだ人もいる。開催後は、感謝や継続開催を求めるメッセージが絶え間なく届いている。

子どもと一緒に来た近所に住む奈々子さん（仮名）は、買い物に出ようと外に出たときにチラシを配るスタッフに出会い、やって来た。３年前に離婚して、８歳の長男と５歳の長女を一人で育てている。歩いて５分くらいのところに祖母がいるが、持病もあるのでコロナ感染を避けるため今は会うことができず、子どもが体調を崩しても頼れる人はいない。年収が少しだけ増えたことにより児童扶養手当が減額され、いっぽうで学童保育料が上がったという。７万3000円の家賃が重くのしかかっているが、府営住宅には入れないと話してくれた。「たまたま今日のとりくみを知って本当に助かった」と母子そろって両手に袋を下げて帰っていった。

大阪市内に住む隆史さん（仮名）は、第２子出産のために四国の実家に帰っているパートナーがSNSの情報を知らせてくれてやって来た。いろんなところでやっているフードバンクに足を運んでいるという。パートナーが一人目の出産を機に退職したため家計はたいへん。いずれは復職を考えているそうだが、しばらくはこの生活がつづく。勤務先の会社は多少仕事量が減ったが、いまは大きな影響はないという。食料品が手に入るのはとても助かると話してくれた。

プロジェクト代表の石橋英代（はなよ）さんが活動をはじめたきっかけは、今年はじめにたまたま知り合った高槻市内の大学に通う一人暮らしの学生の話を聞いたことだった。アルバイト先がなくなった学生などの窮状を知り、いろんな知人や団体に声をかけて１回目を準備した。高槻駅前でバス通学の学生に案内ビラを配っていると、支援のボランティアの輪が広がった。回を重ねるたびに実行委員会も大きくなっている。今回から、高槻市内にある保育・児童・障がい・高齢分野の71施設が加入する高槻市民間社会福祉施設連絡会が地域支援にとりくむ「あんしんねっとあゆむ」事業も支援に加わった。プロジェクトの活動は、食料支援にとどまらずさまざまなくらしの相談に対応するとりくみへと厚みを増していく。　（写真・文　塩見一弥）

フードバンクプロジェクト高槻
TEL：090-6296-5135（石橋、９時～17時）
E-mail：foodbank.takatsuki@gmail.com

【ひろばトーク】
本当にわかっていないのはだれなのか――社会福祉と警察――　宮本　茂　6

福祉のひろば
2021年12月号

●特集●　チームのかなめ！ 主任・フロア長の思い

【座談会】小園麻美／小林圭子／清水千智／小貫公太／臼井知江　10
これからの社会福祉を担う人たちへ　井上ひろみ　26

●トピックス●

【PHOTO】ズームイン！
社会福祉法人同愛会　空とぶくじら社　30
現場の課題と要望を制度・政策へ　正森　克也　32
――社会福祉経営全国会議　政府交渉――
「コロナ禍で福祉に働くひとの声アンケート」の結果を届けてきました！　高倉　弘士　36
コロナ患者の自宅療養（放置）と医療政策の課題　伊藤　周平　38

●連載●

WORK WORK――わくワク――
くるりんばあ夢「夢の力」　ワークショップサクラティエ　46
ミリタンが実現するフランスの福祉
専門職としての自分を築いていく　安發　明子　48
かさねあい、はぐくみあう保育実践
子どもを真ん中に保護者とともに手を取り合って　平尾　恵美　50
夕映えのとき～人生の終え方を支える実践～　井関　りか　54
生きるということは生き抜いたその日まで
自分の可能性をあきらめないこと
ＪＯＢ＆ＡＣＴＩＯＮ　全国福祉保育労働組合（９）
障害者総合支援法の見直しでは、職員配置基準の引き上げを論点に！　58
私の履歴書　社会福祉経営全国会議（９）
選択肢になかった福祉への道　常陸　実　60
阿修羅がゆく　わたしが好きな釜ヶ崎（29）　水野阿修羅　62
相談室の窓から
幼少期の困難が生む深刻な問題①　青木　道忠　64
育つ風景
わが子の泣きと“和解”するまで　清水　玲子　66
ひととしてあたりまえに生きたい
施設建設委員長として（４）　清田　廣　68
映画案内　『朝が来る』　吉村　英夫　70
現代の貧困を訪ねて
「病院の予約がとれない！」コロナうつの医療崩壊　生田　武志　72
似らすとれーしょん道場　似顔絵まんがアート
第百代じゃ！　ラッキー植松　74
ホームレスから日本を見れば　ありむら潜　76
花咲け！　男やもめ　川口モトコ　77

みんなのポスト　44／福祉の動き　78／今月の本棚　81
●グラビア●　くらし応援！　第３回食糧支援in高槻

●表紙の絵●
神門やす子

ひろば トーク

本当にわかっていないのはだれなのか

――社会福祉と警察――

堺市南保健福祉総合センター・大阪自治労連　宮本　茂

私は、福祉事務所の窓口で高齢者のさまざまな相談受付、高齢者虐待や権利擁護、家族調整、地域のネットワークづくりなどの仕事をしています。

区役所にほぼ毎週、いわゆる「ショカツ」、地元警察署の生活安全課の警察官が来所されます。彼らは地域の安全・安心の生活を守るため、高齢者虐待や迷い人の相談を区役所にもってこられます。警察として独特の捉え方はありますが、そのまなざしはやさしい。虐待通告の場面でも、「物盗られや嫉妬妄想などどう対応したらいいのか」「非通院の息子をどうすれば受診させられるのだろうか」とたずねてこられます。

「ここに来る前は交番勤務でした。区役所がこんなにていねいな仕事をしているのを知りませんでした。警察に虐待通報が入ると、まず交番と巡回のパトロール員に連絡が入ります。今は『人身保護案件』は最重点の課題です。最初にかけつけた警察官は、目の前の当事者を見て、ケガの程度、どちらが加害者・被害者かを見ます。興奮している人をなだめ、犯罪かどうか考えます。けがの程度がひどければ救急車を呼び、加害者を確保します。軽微で犯罪要件にも該当しなければ、被害者に告訴するかを聞き、避難しなくていいか確認します。残念ながら、みなさんが言うところの身体的虐待か心理的虐待しか見わけられないんです。ネグレクトや性的・経済的虐待なんて見わけられない。認知症を疑うけれど、きちんと対応できない。子どもは身柄つき拘束で一時保護所に送致できるけれど、大人の場合、警察署に泊まってもらう場所がなく、このままでは危ないと思っても、避難を勧めるしかありません。区役所がそうした保護に対応してくださり、助かります」。くり返されるケースにも、ていねいにかかわられる立派な警察官でした。

その彼が異動時に言ったことが今も記憶に残っています。「私たちは、警察官であっ

みやもと　しげる

1985年、堺市役所入庁。現在は、南保健福祉総合センターで勤務。入庁３年目から労働組合運動に参加、現在は大阪自治労連社会福祉部会事務局長、日本自治労連社会福祉部会部会長。当研究所理事、本誌全国編集委員をつとめる。

て相手を黙らせる力はあります。しかしケースワーカーではないので、問題の原因を解決できません。だから同じ話をくり返す」とまじめな顔で話されたのです。

子どもの虐待死事件がマスコミで取り上げられるたび、なぜ見つけられないのか、なぜ強く制止できないのか、虐待した者を罰することができないのか、との議論が起こります。マスコミの分類では、虐待事件は人権擁護という視点より、「未然に防げなかった」→「不作為」→「行政の怠慢」というかたちでとらえられます。一対一のどんな努力も、悲惨な結果の前では認められないのです。小池都知事の発信も影響し、子どもの虐待事件の死亡事例から、警察と同じエリアの都道府県知事が警察と全面的に情報共有していくという方向が国から追認され、児童相談所も従わなければならなくなっています。しかし、きわめてナイーブな関わりを、犯罪予防の観点で再度見直すというのは、やはり視点が違うと思います。警察もＤＶ事件と合わせて、「人身保護案件」として強く関与しはじめています。マスコミもこれに反応し、強い期待を寄せています。

警察は犯罪を摘発し逮捕するとともに、犯罪を未然に防止することで、国家や社会の治安を維持するという、きわめて特化した行政機関です。しかし、ショカツ・交番でがんばる警察官のみなさんは、ていねいに話を聞き、なんとか解決法がないかと聞いて来られます。だからこそ、ケースワーカーには、社会福祉の専門性が求められるのです。

「生活を丸ごとみるのが社会福祉」「ひとのこころを癒すのはひとの力でしかない」。本人の安心・安全な生活を一緒につくり、それでいて家族の生活を壊さない、そのために社会福祉はあります。こうした人員をしっかり確保するのが、国や自治体の仕事ではないのでしょうか。貧困・孤立・虐待など社会全体の問題を、自己責任で期するやり方には、社会福祉労働者として断固反対します。

特集

すべての経験が福祉実践の専門性に

今号の特集は、現場をまとめ、現場と運営・管理職とのパイプ役を担う、主任・フロア長さんたちの座談会です。現場の仕事にも入りながら、職員の勤務調整、日々の配置調整、部署間の連携、職員育成、人間関係の調整……オールマイティな役割を求められ、日々奮闘されている主任やフロア長のみなさん。三〇～四〇代の方が多く、プライベートでは子育て真っ最中で、仕事とプライベートの両立に四苦八苦されている方も多いと思います。

座談会では、主任・フロア長を担うなかでの悩みや葛藤、大切にされていること、やりがいなどについて交流しました。保育・障害・高齢それぞれの分野から五名の方にご協力いただきましたが、分野を超えた共通の課題や悩み、やりがいを共有しながら、主任・フロア長の経験年数によっても仕事の見え方ややりがいが変化していくことも見えてきました。

今号と前号のトピックスでは、総合社会福祉研究所と福保労の共同でおこなった「コロナ禍で福祉に働くひとの声アンケート」を紹介しています。そこでは、回答者の九割が福祉の仕事にやりがいを感じつつも、同時に八割が「やめたいと思ったことがある」と答え、五割が「仕事が忙しすぎる」、八割が「疲れがとれない」と答えています。

福祉の仕事でなくても、仕事を辞めたいと思ったことがない人は、それほど多くないと思います。

たとえば二〇歳から六〇歳まで働くとして、仕事人生は四〇年にもおよびます。失敗したり、壁にぶつかったり、ウマの合わない人と働くことになったり、ライフステージが変わったりするなかで、「もう無理だ。辞めたい」と思うこともあると思います。今回、主任・フロア長さんへのメッセージをくださった社会福祉法人七野会・理事長の井上ひろみさんは、「長い仕事人生のあいだに少しくらい低空飛行のときがあってもいい」と書いてくださいました。そのとおりだと思いました。

「継続は力なり」とかんたんに言えることではありませんが、毎日同じことのくり返しに感じるときも、少し立ち止まっているときも、いいことも悪いことも、一日一日のすべての経験が自分の糧になっているはずです。そして、そうしたすべての経験が専門性となって発揮されるのが、福祉の仕事の醍醐味だということを、特集の座談会をとおしてあらためて感じました。

もちろん、「辞めたい」と思う理由に、恒常的な忙しさや人手不足があるわけですから、そこは改善していかなければいけません。八割が「疲れがとれない」と答える仕事は異常です。福祉ではたらく人の多くが仕事の支えとしている「やりがい」を守るためにも、そのやりがいを削ぐような状況は改善していく必要があります。

福祉の仕事が好きで、子ども、障害のある人、高齢者の笑顔を守りたい、やりがいとゆとりをもって楽しく働きたいという思いは、新人職員も中堅職員もベテラン職員も、管理職も同じです。それぞれの立場の思いを知り、共感し、共有しあいながら、対象者も自分もともに働くなかまも、守りたいものが守れる福祉の仕事のあり方を考え、行動していきたいと思いました。

（編集主任）